

## 民族芸能から考える職業奉仕

私は、本業である土木施工管理技士とは別に、二つの顔を持っている。一つは、奉仕の理想を求めるローターアクターとしての顔。そしてもう一つは、黒森歌舞伎妻堂連中の一員として舞台に立つ、役者としての顔である。

黒森歌舞伎は、酒田市黒森地域で享保年間から300年にわたり継承されてきた地芝居である。毎年、旧暦の小正月にあたる2月15日と17日に、黒森鎮守の日枝神社の境内で上演、奉納されている。その成立については諸説ある。公的な文書として残っているものでは、村人が彫った翁（おきな）と三番叟（さんばそう）の御面が、まるで神霊が宿っているかのように見事であったため神社に奉納され、三番叟を舞ったことが始まりとされる説がある。一方、村の古老から口伝えで聞く話では、冬の間暇を持て余しがちな若者たちが悪さをしないよう、村の長老らが、娯楽として、そして勧善懲悪の思想を普及させようとして、当時最先端の娯楽であった歌舞伎を若者らに習わせて神社に奉納させるという形で始まったという説もある。いずれにしても、黒森歌舞伎は神事的要素を持って始まった芸能である。

役者は如月（きさらぎ）の厳しい寒空の下、屋外の舞台で雪に凍えながら演じる。観客もまた、肩に雪を積もらせながら舞台を見守る。そのため、黒森歌舞伎は「雪中芝居」とも呼ばれてきた（もっとも、昨今は温暖化の影響か、雪が降らない年も増えてきたのだが）。

私は、ちょうど10年前、平成28年の正月公演で、中学2年生、14歳のときに初舞台を踏んだ。未曾有の疫病の影響で2年間の中止を余儀なくされたが、それでも今年で舞台に立つようになって10年目を迎える。

黒森歌舞伎は、あくまでも地芝居、いわばアマチュア歌舞伎であり、職業ではない。そう書くと、「職業奉仕とは関係がないのではないか」と言われるかもしれない。しかし、私自身の人格形成に与えた影響は、決して小さくないと感じている。歌舞伎の筋書きは、多くの場合「悪は滅びる」、つまり勧善懲悪という価値観が物語の芯として一貫している。その世界に身を置いてきたことが、知らず知らずのうちに、私の仕事観にも影響を与えているのではないかと思うようになった。

土木の現場を一つ任されれば、元請であれ下請であれ、すべての行為に責任が伴う。建設業の世界では、一見すると同じように見える材料でも、性能、品質、単価は大きく異なる。ここで利益を優先して、粗悪な材料や規定に合わない材料を、正規のものと偽って使用すれば、見た目は同じでも、完成後の構造物の性能には致命的な欠陥を生むだろう。「見た目は同じだから大丈夫だろう」、「こっちの方が利益が取れるから」、そんな安直な理由で仕様を勝手に変えることは、契約行為の不履行である以前に、職業人としての倫理に反する行為である。

歌舞伎の世界では、どれほど巧みに取り繕っても、悪事は必ず白日の下にさらされ、最後には裁かれる。観客はそれを知っているからこそ、舞台に引き込まれる。現実の仕事の世界でも、本質は同じなのではないだろうか。

自分の行為は本当に「真実」か、関わる人すべてに「公平」か、相手との「信頼」を深めるものか、そして、社会のために「役立つ」ものか。

黒森歌舞伎の舞台に立ちながら、私は無意識のうちに、ロータリーの四つのテストにも通じる問いを、自分自身に投げかけ続けてきたのかもしれない。職業奉仕とは、特別なことをすることではない。日々の仕事の中で、誘惑に負けず、誤魔化さず、正しいと信じる行為を積み重ねること。雪の降る境内で、誰に頼まれたわけでもなく舞台に立ち続けてきた先人たちの姿に、私はそんな職業倫理の原点を見る思いがする。

地芝居から学んだ勸善懲悪の教えを、今度は自分の職業を通じて、社会に返していきたい。そして、先人からの思いを心に秘め、今年も私は雪の中の舞台に舞い立つ。